曹洞俳壇

選・坊城　俊樹

佐保姫の一雨ごとの足音かな

大阪府　**柏原　才子**

評　「佐保姫」とは佐保山を神格化した女神のこととされる。春の造化を司る神さまである。春とは一雨ごとにやってくる。それはまるでこの姫の足音のように歩んでくるとした。まことに大らかで嫋やかな句となった。

冬耕を眼下に鳶（とび）の高さかな

神奈川県　**小野沢邦彦**

評　冬の耕しのころはまだ大地は枯れ色で閑散とした感じであろう。そこにポツンと独りだけで耕す農夫の姿が見えてきた。それを鳥瞰図のように、鳶の視線でとらえたところにも俳味を感じるのである。

◆花形の切紙散らし春障子　岐阜県　大下　雅子

◆ほほえめばえくぼでかえすすみれかな　長崎県　崎田　定雄

◆冬ざれや主なき畑に鍬一つ　福島県　鈴木嘉志雄

◆ふる里を発つ少年に花こぶし　兵庫県　美濃　敏子

◆梅真白天女御座して在すやも　静岡県　小泉八千代

◆机上にて入学を待つランドセル　茨城県　坂内とくゑ

◆風花や石像凛と沖を見る　鳥取県　眞山　博充

◆春寒し遺品に語ること多し　島根県　俵　保恵

◆手を合し心無にして胸に春　滋賀県　松岡千鶴子

◆朝の日に崩れそめたる霜柱　静岡県　望月かほる

＊選者吟

囀の日へ放ちては瑠璃色に

俊　樹

＊作句小見

「囀り」とは本来木の上から降ってくると感じる。しかし、ことに美しい囀りは空へ放つように感じる。もしそれを色で喩えるならば「瑠璃色」なのではないか。春闌けてきたころの生命賛歌の色彩なのである。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

父臥して幾日ならむ月の夜の障子に映るかりがねの影

福島県　大槻　弘

評　父の病状がなかなか好い方向に向かわない不安な気持ちが「かりがねの影」に重ねられている。とても抒情的に美しく格調高く詠まれているので、現在形で詠われてはいるが思い出の中の一場面のようでもある。

水面に揺れる光を食(は)みながら鯉はかがやき膨らみており

東京都　野村　信廣

評　寒さの中にも光の輝きが増す如月の頃、水面に出てきてあぎとう（呼吸する）鯉の様子が生き生きと詠われている。「膨らむ」に生命力の強さが籠る。

◆**薯を蒔く土に石灰混ぜ均す鍬先に弥生の日射し散らして**
岩手県　宍戸さとる

◆**ジーパンの少女は長き脚伸ばし春泥の道跳びこしてゆく**
東京都　長谷川　瞳

◆**風雪の予報どおりとなる朝従(あたいとに)姉の訃報を使者が伝え来(く)**
鳥取県　山本　浩一

◆**間引かれし養殖若布を茹であぐる磯の香りに父母(ちちはは)しのぶ**
岩手県　阿部　凞子

◆**亡き夫が植えいし水仙今朝ひらく黄に輝くをスマホに撮りぬ**
山口県　濱田　道子

◆**廃校の教室にある望遠鏡巡る星座と旅しているか**
埼玉県　新井巳喜男

◆**我が迷い消して下さる仏像に時を忘れて手を合せおり**
山梨県　北村　富子

◆**床にいてギロリだるまに睨まれぬ病(やまい)の夫にやさしくします**
北海道　菊地　和子

◆**春一番俺の出番と居丈高木を目覚めさせ電線揺する**
福島県　唯木　秀雄

◆**車窓からおばちゃんバイバイ声くるる見知らぬ幼子(おさなご)除雪の我に**
北海道　吉田　洋子

＊選者詠

後ろからかけし言の葉届かずに俯(うつむ)いてゆく陽炎(かげろう)の中

ちづ

＊作歌小見

「弥生の日射し」「春泥の道」「磯の香り」などに春を迎える季節感を、また一方「除雪」の歌もあり、日本列島の南北の長さを味わいました。北海道の吉田さんの一首、列車の窓を開けての声掛けなら、それも春の訪れなのかも知れません。

大本山永平寺

山作務・川作務

夏になると永平寺では、よく山や川の中で作務をいたします。深緑の山の中で掃除をしておりますと、何とも言えない清々しい気持ちになります。

林の中を掃き、川の中を磨き、山の中を草取りするのですから、もちろん終わりはありません。

実は、この作務にこそ、永平寺に連綿と伝わる大切な用心があるのです。

昔、慧蔵という和尚が寺の台所でせっせと働いておりました。

ある日、慧蔵はやってきた他の和尚に「お前は台所で何をしているのか」と問われます。すると慧蔵は「はい、牛に餌をやっております」と答えます。もちろん、台所には牛などおりません。

すると、その和尚はさらに「どうやって牛に餌をやるのか」と問いかけます。慧蔵は「牛が脇道に入っていったら、すぐに手綱を引っ張ってきます」と答えました。

質問をした和尚は、「それでこそ、本当に牛に餌をやれるな」といいました。

ここでいう「牛」とは、私たち自身のことでしょう。日々の生活の中で、わが身・わが生活をととのえ続ける姿は、そのまま仏さまです。

永平寺の修行僧たちも、それぞれの手綱を引いて、作務をするのです。

ここでは、春には花が、夏には草木が、秋には紅葉が、冬には雪が境内を彩ります。どの季節になっても、作務は終わることがありません。修行僧たちは、日々の修行生活の中で、仲間と共に切磋琢磨し、自己を浄むる作務に身を投じているのです。

大本山永平寺／０７７６-６３-３１０２

大本山總持寺

伝光会摂心

参と不参によりて徹人未徹人あり

入梅の時節を迎え、紫陽花が雨に映えるようになりました。

境内全体が新緑に包まれる中、本年度の「伝光会摂心」が六月四日（月）から八日（金）まで行われます。

期間中は坐禅に徹するとともに、池田魯参老師（駒澤大学総長）ご提唱による『伝光録』を参究します。

これは昭和二十一年に独住第十七世の渡辺玄宗禅師が私財を投じて始められた行持で、一般の方も参加できます。

『伝光録』は、瑩山禅師がお示しになられたもので、お釈迦さまから始まる五十二人の祖師方についてそれぞれ章を設け、お一人お一人の足跡や教えが紹介されています。また瑩山禅師の尊いお言葉もちりばめられております。この『伝光録』を参究し、坐禅に励むのが伝光会摂心なのです。

副題の言葉は「仏道に参じるか参じないか、この違いこそが徹底した人とそうでない人の分かれ道である」という『伝光録』の一節です。特に、この春上山したばかりの修行僧にとっては初めての摂心であり、それぞれが徹人を目指す五日間となります。伝光会摂心が終わると、夏安居の修行もいよいよ仕上げに入っていきます。

大本山總持寺／０４５－５８１－６０２１